



構想に2年！ 渾身の授業

薬学部3年生前期に行われる化学論文発表演習は、中山先生が発起人となって始まった選択授業です。この事業をサポートする有機化学の若手の先生たち（猪熊先生、田良島先生、中尾先生）が発表した学術論文をもとに、学生たちが資料作りから学術プレゼンまでを学習します。

「この授業を行うきっかけは学部生の研究室配属が後期から前期に変更になるタイミングで新しく『意味のある』授業をやりようと思ったことでした。どんな分野でもプレゼンテーションは非常に重要なので、早い段階で基本的なことを学んでもらいたいなと思い、今回の授業を行いました。プレゼンを通して人に伝える技術がある程度統一して教えるような授業はこれまでになかったので、2年前から少しずつ構想を練り、そして3



先生たちは声量やスピードなど、話し方も細かくアドバイス。パソコンで作った資料とスクリーンに映した場合の見え方の違いにも気を配り、見る人にわかりやすいプレゼンになるよう心掛けることの重要性を伝えていました。

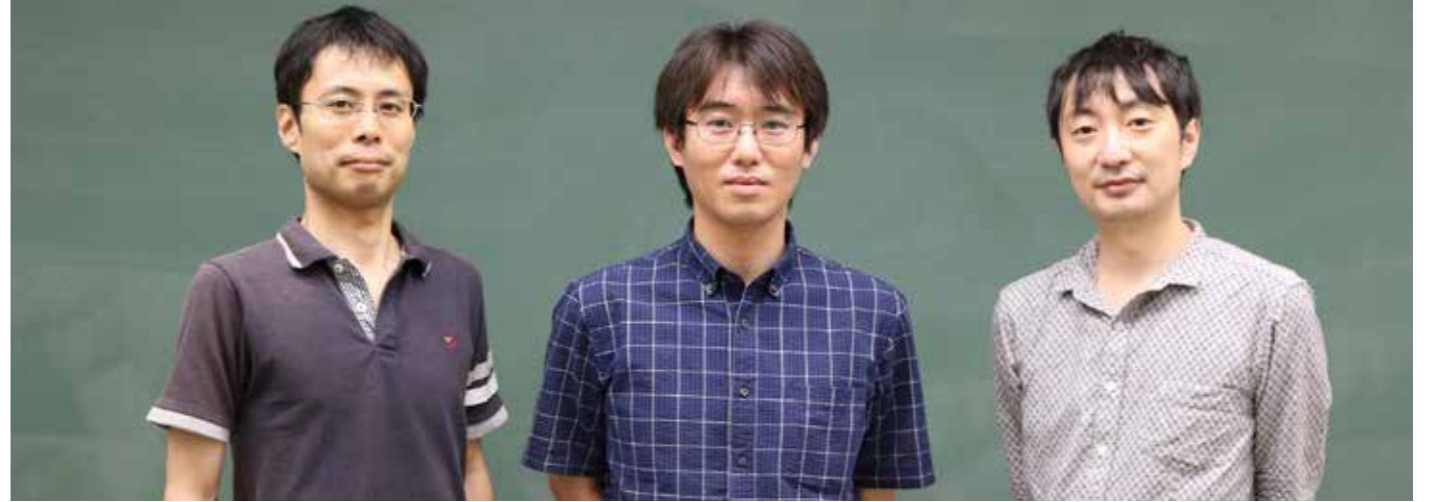


堂々とプレゼンを行う学生たち。生物系の学生も受講していて、授業への関心度の高さがうかがえます。

世界トップレベルの研究者を目指し プレゼン力を身につける

大学院医歯薬学研究部 薬学域 助教

中山 淳 (なかやまあつし)



写真左から中尾允泰先生、中山淳先生、猪熊翼先生。この3人の先生にプラス田良島典子先生と一緒に授業をサポート。

人の先生方の強力なお力添えがあり、実際に授業することができました。」

プレゼンの極意は 相手を思い、準備すること

「プレゼンには資料を作成・配布するパターンと、対面でプレゼンをするパターンがあること」学会発表とビジネスプレゼンは異なる」など、プレゼンに関する基本的な内容を学ぶ講義から始まり、実際に研究室配属してすぐに役立つように、資料配布と対面プレゼンパターンのそれぞれを想定して、学生たちは資料作成を行います。

学生たちは、講義時間外でもサポートしてくれる若手の先生方に相談し、添削を受けながら精度を高め最終プレゼンに臨みました。計画段階では、対面でそれぞれの先生に質問できるように考えていたのですが、新型コロナウイルスの影響でオンラインに変更。そうした状況でも学生たちは熱心に取り組み、先生たちの想像を上回る資料ができあがりました。

「プレゼンではセリフを暗記するくらいの気持ちでやって欲しい」と思っていました。が、ほとんどの学生がほぼ暗記してプレゼンしていたことには驚きました。内容

も素晴らしく、学会発表でも通用するくらいのハイレベルなプレゼンができていたと思います。」

プレゼン資料の評価ポイントは統一感があり美しいこと。そして、知らない相手に伝えるために、独りよがりにならないこと。

「相手のことを第一に考えたプレゼンを心掛ける。そういうところが評価項目として挙げられますが、テストをしているわけじゃないので、合格・不合格を決めるものではありません。」

こうした状況でなければ僕たちがプレゼンしているところを見せたい指導できればもっと良かったんですけどね。ポインターの使い方もひとつとつてみても、目線を誘導するために使うので、実演した方がわかりやすい。詳細なところを伝えるための対面講義とオンライン講義を組み合わせて行うことが重要と感じました。」

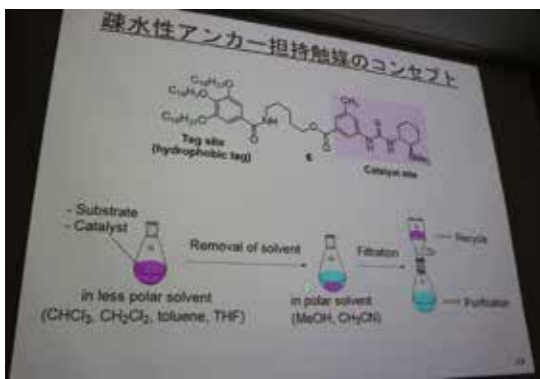
プレゼンとはとにかく練習。練習を重ね、研究者になった初期の時点でプレゼンに必要な基礎を叩き込んでおくと、その後、大きく飛躍できると話す中山先生。4人の先生たちが思いを込めて伝授したプレゼンの極意は、研究者への道を歩み始めた学生たちにとって大きな財産になったように思います。実は、発起人である中山淳先生



椅子には使用禁止のテープが貼られ、3密を避けて授業が行われていました。



最終プレゼンもオンラインで実施。順番を待つ学生3人が入室できる程度で、他の学生は各自オンラインで視聴。



は10月から大阪市立大学への異動が決まっており、今回が中山先生にとって最初で最後の化学論文発表演習の授業でした。「自分たちはトップレベルになれる、という気持ちを持って日々の研究生活を送ってほしいですね。徳大生はポテンシャルがあるのに、そのことを自分で信じていないように感じています。しかし、今回のプレゼンを聞いて、やはり彼らのポテンシャルの高さに確信を持ちました。『自分を信じる』が私の好きな言葉です。自分勝手な意見を持つことを意味しているのではなく、『自分の可能性』を信じてくれることを願っています。」